さくら、ふたたび

マランビジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さくら、ふたたび

【Ｎコード】
Ｎ２５６９Ｔ

【作者名】
マランビジー

【あらすじ】
周囲を騒がした佐倉響子がパプアニューギニアから帰国し、日本で事業を立ち上げます。
真意を伏せたまま得意の絵を活かしたプリントシャツで営業開始！
多くの人々を巻き込みながら『梅干し柄』を売り込む佐倉。
彼女の真意が見えた時、彼女とのお別れが訪れます。

1　さくら帰国予告なのだ

私がめでたく結婚をして妻のお腹が大きくなり子供の出産を間近にしていた頃、一通のエアメールが届いた。差出人はキョウコ・カーライル。知らない名だった。封筒を開けて中を見ると懐かしい息吹が便箋を通して伝わって来た。

『ご無沙汰してます。旧姓、佐倉響子です。お元気ですか。うっかり新婚旅行を忘れていたので東京見物をすることになりました。浅草とか東京タワーに行こうと計画を練っています。日本に戻る際にはご連絡しますのでお時間をいただければお会いしたいです。久々の日本なので二週間ほど滞在しようと思っています。それまでにたくさん絵を描いて結婚祝いにできそうな絵を選んでもっていきますのでお楽しみに！』

佐倉だった。相変わらずだった。お会いしたいと書いておきながらすでに会うことが前提になっている。予定を他人に決めさせないところはまるで変わっていなかった。私は妻に手紙を渡すとそれを読んで嬉しそうに笑った。

「相変わらずね」妻は何度も手紙を読み返した。その日妻は佐倉に返事を書いた。女同士のことだからと言って手紙の内容は教えてくれなかった。しかしどんな手紙を書いたのかは容易に想像がついた。彼女なりの感謝と出産祝いの催促に決まっている。出産祝いは間違いなく生まれてくる子供の絵だ。息の合う上司と部下だった二人は私の知らない側面も多くあったが想像を超えることは決してなかった。そもそも佐倉の行動が想像を常に超えていた。慣れるまでは随分振り回された。

「春に帰国するみたいよ」妻は佐倉からの返事を読んですぐに教えてくれた。遠い国にいるはずの佐倉は我が家の予定を大きく揺さぶっていた。

「赤ちゃんが先ね」妻は入院の準備をしながら鼻歌を歌っていた。

まるで佐倉が妻に歌わせていたようだった。部屋中がマタニティグッズで溢れ、しかも赤ん坊の洋服と玩具が部屋を占領していた。すでにまだ誕生していない赤ん坊が主役の家庭になっていた。

「佐倉はまだなんだって」妻が言った。

「何がまだなんだよ？」

「赤ちゃん！」

「あぁ、赤ちゃんか」佐倉に子供なんて私には想像できなかった。佐倉の遺伝子は残すべき価値があるがこればかりは私たち夫婦にはどうすることもできなかった。冬の寒さが身に凍みる十一月。月の明るさは夜空を飾り星々の瞬きがいつもより煌びやかに見えた。佐倉効果はその光彩を失ってはいなかった。

2　さくら永住予告なのだ！

私たちの子供が生まれて妻が子育て休暇をもらった。日々「お帰りなさい」と言ってくれることは幸福なことだ。男の一方的な幸福感だが妻はそれを良く理解していた。妻は子育ての合間に佐倉への手紙を書いていた。何度も佐倉に書いているのでそれと同数の返事が送られてきた。

『マネージャーのお子さんかわいいですね。きっと美人になります。写真にチーフが写っていなかったのが残念でした。どんな顔をしているのか見たかったです。きっと目尻が下がっているだろうと期待していました。私が喜んでいるチーフの顔を絵にしたので同封します。楽しんでください。それから今度の帰国で日本永住を決意しました。鎌倉か奈良がいいなあと思っています。旦那は東京がいいと言っていましたけど却下しました。日本に戻ったら部屋探しです。落ち着いたら二世のことも考えます。マネージャーのお子さんに会える日を楽しみにしています。ではその日まで』

妻に届いた手紙を読んで佐倉の変わらない様子に安心した。同時に日本永住の決意に驚いた。佐倉の夫の困惑を想像すると気の毒な気がした。私が手紙を読んで笑いかけた時、妻が私の脇で大笑いをした。何かと思って見ると佐倉が描いた同封された絵だった。子供を見て目尻を垂らした私がコミカルに描かれていた。腹立たしいほど特徴をよく捉えている。不在でも人を喜ばせる佐倉には本当に感心した。

3　さくらの催促なのだ！

梅の花が咲くと梅の花の絵を佐倉が送って来た。南半球でも梅は咲くのだろうか。季節は日本と反対のはずなのに。

『チーフの筆不精には驚きます。返事ももらえないので催促します。マネージャーは何通も手紙をくれるんですよ。マネージャーが送ってくれた梅の写真を見て絵を描いたので同封します。それから桜が咲く頃には日本に戻ります。家が見つかるまでは横浜の実家にいることにしました。成田に迎えに来てくれますか？赤ちゃんがいるから無理ですかね。荷物がいっぱいあるのでお願いしたいです』

さすが佐倉だ。出迎えの催促までするのだから驚いてしまう。荷物が多いとはどういうことなのだろうか。車で来いということだろうか。私は筆不精を恥じて返事を書くことにした。

『前略、相変わらずのマイペースに驚かされると同時に安堵しました。大量の荷物でのお帰りとのこと。お出迎えは車で行けば良いのかな？予め教えてください。

梅の絵を送ってくれてありがとう。妻が額に入れて部屋に飾っています。日本に戻ったら桜の絵を描いてください』

私はこちらからも催促をした。この程度で佐倉が困惑することはないと思った。彼女なら張り切って桜を描いてくれることだろうと思った。嬉しい催促を受けて佐倉を待ちわびた私と妻は出迎えの準備を楽しんでいた。

4　佐倉の帰国

春の訪れは桜の開花とともに幸福感まで連れてくる。この年は佐倉の帰国も重なり幸福感は更に膨らんだ。私は自家用車で佐倉を出迎えるために成田に向かった。妻と娘は自宅で待機させた。妻は出迎えに行きたがったが娘の体調が悪かったのでどうにもならなかった。

「佐倉が到着したら真っ直ぐ家に戻ってきてね」妻は私が出掛ける際に寄り道を禁じた。私は当然そのつもりだったが佐倉が予想通りに動いてくれるとは思えなかった。私が飛行機の到着時刻にゲート前で待っていると意外にも佐倉はすぐに姿を見せた。

「チーフ！ご無沙汰です」佐倉は大きな荷物に見え隠れしながら夫を伴ってゲートから出てきた。佐倉の装いは麦わら帽子にヨレヨレの白シャツ、フレアスカートはパイナップル柄だった。佐倉の夫はパイナップル柄のシャツにGパンだった。

「はじめまして」佐倉の夫の日本語は流暢だった。

「この人、インドで日本語を教えていた変なイギリス人なんです」佐倉がおかしな紹介をした。

「お前は似顔絵で生計を立てていたおかしな日本人だったじゃないか」夫も負けてはいなかった。

「はじめまして」私は佐倉の夫と握手した。とても日本人には真似のできない眩しい笑顔だった。佐倉といれば笑顔も変わるのかもしれない。私はそう思った。

「マネージャーはどうしたんですか？」佐倉が言った。私は子供の体調を話して来られなかったお詫びをした。

「いやぁ、早くお子さんが見たいなぁ。マネージャー似だったらいいですねぇ」佐倉は私を前に失礼なことを言った。

「おい、私に似ていてもかわいいとは思わないのか？」
「いやぁ、マネージャーに似ていたほうがいいですよぉ。絶対マネージャーに似ていてほしいなぁ」佐倉は自説を曲げる気はないようだった。佐倉の夫が私に詫びたが佐倉はまるで気にしていなかった。
「チーフ、今日の夕飯は御一緒出来るんですよね」佐倉は早速食事の心配をした。
「もちろん、我が家で準備しているぞ。何か嫌いな物とかあるのか？」
「私もこの人もありませぇん」佐倉は荷物を引きずりながら陽気に笑った。佐倉は家に戻るまでパプアニューギニアでの話しを延々と語った。そのほとんどが睦まじい夫婦の話しだった。佐倉には不幸な話しなどあるはずはないのかもしれなかった。私はそう思ったがそれは思慮が浅かった。

5　うめをえがくさくら

私は家の近所にある桜並木を通った。予想通り佐倉は歓声を上げ子供のように喜んだ。「やっぱり日本はいいですねぇ。色合いが日本そのものだなぁ。強い色彩に慣れると微妙な感じが描けなくなっちゃいますよ」佐倉は誰に言うでもなく桜を眺めた。

桜並木を過ぎて我が家に到着すると佐倉は妻との再会を喜んだ。男にはついていけない会話が始まり私と佐倉の夫は政治談議で盛り上がった。国際的な会話はいつしかファッションを軸に盛り上がり妻と佐倉も合流して熱を帯びた。

「ダニエル！今度は梅干し柄のパジャマを作るぞ！」佐倉はおかしなことを言った。

「梅干し柄？」私は失笑した。妻も同じく失笑した。

「ＯＨ！素晴らしいね。きっと響子に梅干し柄は良く似合うよ」佐倉の夫のセンスは佐倉に汚染されていた。そもそも梅干し柄の生地があるとは思えなかった。

「やっぱり日本は梅干しですよねぇ。そう思いませんか、チーフ」同意を求められて私は言葉を失った。

「ねぇ佐倉、梅干し柄はないと思うな」妻が佐倉を諭すように言った。すると佐倉は鉛筆でスケッチブックに佐倉が思い描く梅干し柄を描き始めた。梅干しの輪郭に目と鼻と口、舌を出してウィンクする梅干し顔が描かれ、その顔を梅の花が囲んでいた。佐倉のセンスはやはり何かが違っていた。

「うん、これならかわいいぞ。お子さんのパジャマにはこれがいいですよね」佐倉は絵を掲げて妻に見せた。

「かわいいね」妻は絵を見て大喜びした。

「よし無地の生地にプリントしようっと」佐倉は早速娘のためのパ

ジャマの構想を練っていた。

6　佐倉のため息

その日、佐倉は娘の寝顔を描き、妻を描いて私も描いた。佐倉の帰国を喜ぶ人は多いのに帰国当日に我が家族を佐倉が選んだことを申し訳なく思った。佐倉は実家ではなく我が家を優先したのだ。喜びのあまり気にもかけなかった。

「佐倉、ご実家には連絡してあるの？」妻が尋ねると佐倉は「はい」と簡単に答えた。

「ご両親も心配していたでしょう」と妻が尋ねると佐倉は「父ちゃんも母ちゃんも心配じゃなくて怒っています。勝手に結婚して、勝手に海外に行っちゃいましたから」と答え表情を曇らせた。佐倉は両親の賛成も得られないまま結婚していたのだ。

「母ちゃんがあんなに怒ったのを見たのは初めてだったなぁ」佐倉は思い出しながら呟いた。

「せっかく帰国しても親に歓迎されないんじゃつらいな」私は佐倉に声をかけた。

「いやぁ、つらいですねぇ」佐倉は笑って見せた。

「でもご実家にしばらくはいるんでしょう」妻が佐倉に聞いた。

「でも父ちゃんと母ちゃんはインド旅行に行っているんですよ」

「インド？」私と妻は同時に言った。

「はぁ、私が面白いぞって教えたら夫婦揃って旅行に行っちゃったんです」佐倉の親も娘に負けず破天荒だった。

「それって避けられているの？」妻は恐る恐る尋ねた。

「いえ、それはないです。お父ちゃんもお母ちゃんもいつまでも怒ってないです。奈良か鎌倉に住みたいって言ったのがいけなかったんです」佐倉はため息をついた。

「そうなの？」妻は意外な佐倉の答えに驚いた。佐倉家の考えることはまるで理解ができなかった。

「一番のまずかったのはダニエルの親に会わせていなかったことですねぇ。でもまさか勝手に会いに行くとは思わなかったなぁ」佐倉は更に深くため息をついた。
「勝手に会いに行ったの？」妻が更に驚いた。
「そうなんですよ。インドからイギリスまで行くらしいです。英語も話せないのにどうするんだろう？」
「お前の両親ってすごいな」私は驚くと同時に感心した。
「ボディランゲージで大丈夫とか言っていましたからねぇ。困った親です」佐倉の言うこともわかるが同行しない佐倉にも驚かされた。

7　佐倉二世登場

その日の佐倉は娘を喜ばすことに余念がなく、食事の時間を除けば我が子に張り付いてあやし続けていた。その間に即興で描いた我が子の絵は十枚を超えた。それらは我が家にとって何よりのプレゼントとなった。佐倉が去った後の我が家はまさに祭りの後のようで子供の泣き声さえささやかなものに思えた。

それから佐倉は何度かの手紙を寄こしたが忙しく出歩いていたようで会う機会は訪れなかった。一方、佐倉のご主人は英語教師の仕事を見つけ都内で忙しくしていた。

佐倉が帰国して次の桜の季節が訪れた時に佐倉は突然現れた。佐倉が伴った佐倉二世は女の子。妊娠したことさえ知らせずに突然彼女は現れたのだ。

「約束のものをお持ちしましたよ！」佐倉は挨拶もせずにいきなり大きな紙袋から梅干し柄のパジャマを幾つも取り出した。

「サイズがたくさん揃っているのでしばらく梅干し柄をお召しになれますよ」佐倉が取り出したパジャマはパイル地の柔らかいパジャマだった。どれにも佐倉が描いた梅干し柄がプリントされていた。

突然現れた佐倉はパジャマを届けにきたのだ。

「佐倉、その子ってあなたの子？」妻が尋ねると佐倉は照れくさそうに「はい」と答えた。

佐倉二世は佐倉の背におぶられて寝ていた。

「その子にはパジャマ作ってあげないの？」妻が尋ねると佐倉は「母ちゃんがたくさん作っちゃってこの子が着るモノはしばらく必要ないんです」と答えた。

「チーフも梅干し柄のシャツ着ますか？」と佐倉は私に聞いたので私は右手を振って遠慮した。

「そうなんですか？今縫っているんですよ。夫婦でお揃いのシャツなんて持ってないですよね」佐倉は私と妻の顔を交互に見た。
「いや、でも娘にこんなにたくさん貰っちゃったのに悪いよ」と私は答えた。
「そんなことないです。梅干し柄を流行らせましょうよ。チーフとマネージャーが着て街を歩いてくれたら注目を浴びること間違いなしです。うちの旦那にも着せようと思っているんです」
「お前は着ないのか？」私は当人が着ないのはおかしいと思って尋ねた。
「私は毎日着ていますよ」と佐倉は答えた。
「どこで？」妻が尋ねた。
「お買い物に行く時とか、お花見の時ですかねぇ。近所を歩く時は梅干し柄に限りますよ！」佐倉は楽しそうに言った。佐倉が言うようにとても注目を浴びそうだった。しかし流行るとは到底思えなかった。それにこれで街を夫婦揃って歩く気にはなれなかった。
「来週持ってきますね」佐倉は玄関先で紙袋を置くとそのまま飛び出して行った。

8　ペアルック

佐倉は時間を守らないが約束を守る。矛盾しているようだがそうなのだ。翌週になると佐倉は再び我が家にやって来た。今度は家族揃って現れた。佐倉の夫も佐倉も梅干し柄のシャツを着ていた。妻は目を丸くして一瞬呼吸までとまった。鼓動まで止まるのではないかと思うほど驚いた顔をしていた。私は一瞬鼓動も止まったような気がした。梅干し柄を着た二人はインパクトが大きかった。

「いやぁ、近所で注目の的でしたよ。この柄かなり好評ですよ。早速チーフとマネージャーも着てください。お嬢ちゃんにもパーカーを作ってきましたよ」佐倉は満面の笑みで出かける催促をした。佐倉が手にしていた紙袋の中にはシャツ二枚と子供用のプルオーバーのパーカーが入っていた。その紙袋を佐倉は突き出して妻に渡した。

「これならすぐに流行の柄になるネ」佐倉の亭主のダニエルも大変な乗り気だった。困ったのは私と妻だった。確かに佐倉の梅干しプリントはセンスが良いと思ったが身につけるとなると相当な勇気が必要だった。

「どうしたんですか？早く着替えて下さい」佐倉は一向に動こうとしない私と妻に促した。

「もしや、照れているんですか？大丈夫でぇす。私の車で行きますからネ」ダニエルが安心材料を投げかけた。

「あぁドライブですか」私は安堵して妻にも着替えを促した。外を見るとルノー４が停車していた。

「早く、早く、駐車禁止で捕まっちゃいますよぉ」佐倉が更に催促したので私と妻は慌てて着替えた。自分の姿を確認もせず慌てて玄関に向かいそこで妻と私をお互いの姿に苦笑した。似合っているとかいないとかそういった問題ではなかった。我が子の姿はどのような装いでもかわいかった。それにしても同じ柄を身に付けた家族というのは予想以上にインパクトが強いと思った。それが佐倉の思惑

なら大した策士であった。
「さぁ古巣に向かいますよ！」佐倉は威勢よく言った。
「古巣って、まさか！」私は佐倉の宣言を聞いて青ざめた。

9　梅干し柄デビュー

ダニエルのルノー４の後部座席に私と妻と娘が乗り込むと佐倉は『こんにちは赤ちゃん』を歌いだした。それを聞いてダニエルも一緒になって歌いだしたので私は行き先を聞けなかった。車の冷房がないため窓を全開にしていたのでダニエルと佐倉の歌は通りを歩く人々の注目を集めた。佐倉の歌は梅干し柄以上の注目度だったのだ。信号で車が停まると歩行者は佐倉とダニエルを見て笑っていた。私と妻は車の中でずっと下を向いていた。とても外を見る気にはなれなかった。私の娘は佐倉の歌が気にいったようで上機嫌だった。私は娘がおかしな影響を受けそうで困惑していた。

「到着ですよぉ！」佐倉は車が停まると到着を知らせてくれた。結局佐倉が言った古巣が判明したのはこの時だった。

「自由が丘！」妻は仰天した。梅干し柄を着て人が集まる街にやって来たのだ。私も顔面蒼白だった。

「ワオ！この街で梅干し柄が有名になるよぉ！」ダニエルは歓声をあげた。私は悲鳴をあげたかった。妻は娘を抱いたまま硬直していた。

「六人で着て歩いたら目立ちますよ。気持ちいいですねぇ」佐倉は気持ちが良かったらしいが私は気持ちが悪くなってきた。

「ねぇ、佐倉、私なんだか気分が悪くなっちゃたの。今日は帰ろうよ」いつも強気な妻が佐倉の前では気の毒なほど気弱だった。

「そうなんですか？車酔いかなぁ。ダニエルの運転がマズかったんだな！」佐倉は勝手に決め付けてダニエルを責めた。

「ＯＨ！すいませんでした。でも大丈夫ね。響子が休憩場所を用意しているよ」

「休憩場所？」私はとても嫌な予感がした。佐倉は車を降りて大きく伸びをした。

「チーフ！マネージャー！こっち、こっち」佐倉はスキップで先を進んでいた。妻と私は意を決して車を降りた。人通りで溢れる街中で「かわいい！」という歓声があがった。梅干し柄を着ていることを思い出した。佐倉の思惑通り梅干し柄は注目を浴びた。ダニエルは歓声があがった方に向かって両手を振ってジャンプした。

「こらぁ！ダニエル、そっちじゃないぞ」佐倉が大きな声でダニエルを呼んだ。突如街に現れた梅干し集団はこの夫婦の派手な立ち回りで余計に目立った。私と妻はまたしてもうつむいて佐倉とダニエルの後に続いた。この夫婦と行動を共にした時点で目立つことは分かっていたはずなのに佐倉のペースに乗せられてしまった。その佐倉が向かった先はなんと私が管理する自由が丘の直営店だった。

「部長、佐倉とお揃いじゃないですか」店から出てきたスタッフが大笑いした。佐倉とダニエルは梅干し柄を褒めてくれた通行人に派手なアピールをしていた。生涯で最も人の視線を浴びた日は始まったばかりだった。

１０　佐倉のセールス大作戦！

私は佐倉とダニエルが通行人に派手なアピールをしているのをよそに直営店の店内に避難した。そして妻と子どもを店の奥にある狭い休憩用のスペースに通した。まさか家族揃って、しかも同じ柄の服で職場の人間の前に姿をさらすことになるとは思わなかった。

「このシャツ、うちの店でも売れそうですよね」とスタッフが言った。

「そうか？」私はいきなり仕事モードに変わった。

「佐倉はそのつもりで来たんじゃないですかね」と店長が言った。

「この柄が売れるのか？」私は自分が身につけている梅干し柄が自分の仕事に絡むとは予想さえしていなかった。

「でも、売れるかも」と妻が言った。

「本当に？」私は仕事と家族の狭間で梅干し柄を改めてじっと見た。佐倉は梅干し柄を私と妻に営業したかったのだ。私は佐倉が子供を育てながら自分で出来る仕事を模索していたのだと気付いた。派手なパフォーマンスの裏に佐倉の母親としての自覚を感じた。妻は私よりわずかに早く気づいたようだった。

「うちの店で売ろうかなぁ」妻は私の表情を観察するように見つめた。

「おい、うちが先だぞ」私は妻に言った。

「あら、まだ商談もしていなでしょ。私は今日このあと佐倉に条件提示するわよ」妻の決断は早かった。若くしてマネージャーまで昇進しただけのことはある。

「おっ！家族お揃いで和んでいますねぇ」佐倉が顔を出した。

「ねぇ佐倉、この梅干し柄の商品を本牧の店に納品してくれないかしら。買取りは無理だけど委託なら私が話しをつけてあげる」妻は佐倉が何も言っていないのに条件提示をした。

「本当ですか？やったぁ！」佐倉は背負った自分の子供を見て「マ

イちゃーん、マイちゃん柄が売れまちゅよぉ」と言った。
「マイちゃんっていうの？」妻が佐倉に聞いた。
「そうでぇす。梅って書いてマイです」佐倉は娘をあやしながら答えた。
「へぇ」私は梅と書いたらおばあさんみたいだと思った。
「ばあちゃんが梅って名前だったんですけど同じ読み方だと年寄り臭いからマイにしたんです。梅が日本に渡来した時はメイとかマイとか発音したらしいですよ」佐倉は娘の名前を決めるのに色々と調べたようだった。
「でも梅って書くんでしょ」妻が聞くと佐倉は「戸籍上はマイです。そもそも英国籍ですから漢字じゃないんですよ」それはそうだと思った。英国籍なのにイギリスに居住していない不思議な夫婦なのだ。
「チーフ、自由が丘でも売ってもらえないですかね？」佐倉には遠慮という感覚はなかった。
「今度の会議で私が通すよ。条件はそれからだけどかまわないのか？」私が言うと佐倉は店外にいたダニエルの元にすっ飛んで言った。
「ダニエル！やったぞぉ。営業成功だぞ」
「本当かい？それは良かったネ」ダニエルは自由が丘の店の前でステップを踏んで喜んだ。佐倉はマイちゃんに何か呟いていた。私と妻はこの夫婦の策略にまんまと乗せられてしまったようだ。

11　梅干し柄の商品化

佐倉の梅干し柄は我が社で大きな波紋となった。その場にいなくても人を騒がせる才覚は健在なままだった。私は営業会議の際に議題として佐倉の梅干し柄シャツを提出した。私は前日の晩に妻の意見を聞いて書類を作った。商品化となれば佐倉が持ちこんだままでは通らない。夏を迎える前に半袖で商品化せねばコストも合わなかった。生地も変える必要があった。私はあれこれと思案した末書類にしたが睡眠不足だった。佐倉の人気が如何にずば抜けていても商品として採用するには多くの手続きをクリアせねばならず、本来商品企画を行うデザイナーたちの反論もかわさなければならなかった。

「これなら売れると思いますよ。企画部の商品とは別に作ればいいのではないですか」営業部員のひとりが言ったが売れるだけでは意味がない。商品化のコストを払うだけの余力は営業部にはなかったのだ。

「直営店の仕入れ予算から借りることはできないんですか？」斬新だが強い反発を招きかねない意見も出た。私は微妙な立場だった。提案者であると同時に予算に対する責任を負っていたのだ。佐倉には申し訳なかったが委託条件でお願いするしかなかった。買取りであれば売れ残っても納品分は佐倉の元に入金されるが委託であれば実際に売れた数の支払いになってしまう。私は決断した。委託でお願いするしかなかった。私は佐倉の実家に電話をして会議の結果を佐倉に伝えた。

「おっ！だったら明日半袖シャツを百枚納品しに行きますよ。チーフありがとうございます」と佐倉は言った。いつもの会議より疲れた。ところが企画から私に入った報告は私の疲れを吹き飛ばした。

「佐倉さんのデザインした梅干し柄を企画部で採用しましたのでご

報告いたします」私はその内線に驚いた。佐倉は企画部にも手を回していたのだ。恐らく佐倉は子どもの面倒を見ながらミシンと向き合っているに違いなかった。母となった佐倉は猛烈に働く母ちゃんに変貌を遂げていた。

その翌日ダニエルが我が社にやって来た。車に商品化された梅干し柄のシャツを梱包したダンボールが積まれていた。

「響子が忙しいので私が納品に来たですよ」ダニエルは陽気な笑顔で私に言った。

「これはきっと売れるですよ。梅干し柄のシャツ以外にどんなデザインがされるか楽しみネ」ダニエルは納品を済ますと早々に引き上げた。その日、企画部では梅干し柄でピーターパンカラーのブラウスを立案していた。襟に丸みのあるピーターパンカラーはシャツよりも女性らしさがあった。

「部長、このサンプルが仕上がったら佐倉に見せてあげてくださいね」企画部長がわざわざ私の元にきて言った。佐倉旋風が社内で再び吹き荒れていた。

12　梅干し柄の量産化

佐倉の梅干し柄はその週の私の仕事を梅干し色に染めた。直営店での取り扱いまで決まって佐倉は三百枚以上のシャツを量産することになった。しかも妻の管理する店でも取り扱いが決まっていた。夜になるとダニエルも梅干し柄のシャツを作る手伝いで疲労が溜まっていたようだった。電話をしても十回以上コールしないと出てくれなかった。

「はーい。佐倉です」電話に出る佐倉は陽気だったが声に張りはなかった。

「大丈夫なのか？」私が電話で聞くと佐倉は必ず「大丈夫です！」と答えた。しかし私の妻はそうは思っていなかった。

「今度佐倉の家に言ってみようかな」妻は佐倉の多忙を案じていた。

「そうだね。それがいいよ」私も妻に同意した。

妻は出勤の際には子どもを連れていた。彼女の会社には育児所があったのだ。やはり大企業は福利厚生の扱いが違う。女性の社会進出を歓迎する会社のお手本のようだった。お陰で妻は子どもと出勤し子どもと帰宅できた。しかし、その日は帰宅前に佐倉の実家に寄ったのだ。佐倉の実家を訪ねて帰って来た妻は安堵の色を浮かべていた。

「佐倉ったら凄いのよ」妻は嬉しそうだった。

「どんな様子だった？」私が尋ねるのを待っていたかのように妻は

「佐倉ね、二人も人を雇っていたの。ミシンも三つあったわよ。佐倉ったらお母さんまで使ってシャツを作っていたの！」と言った。

「大したもんだね」

「梅干し柄のTシャツも作っていたわよ」

「Tシャツ！」

「うちにも納品してもらえるように頼んできたわ」
「即決だな」私は妻の決断に感心した。
「あなた、平日に休み取れないの？」妻は唐突に休暇予定を聞いてきた。
「なんで？」
「一区切り付いたら佐倉の実家に一緒に行きましょうよ」
「どうして？」
「佐倉が相談したことがあるんだって」
「相談？」私は何故か嫌な予感に襲われた。
「いいでしょ」妻が笑顔で懇願した。私は妻の笑顔には逆らえなかった。

13　英国を目指す梅

佐倉の相談では以前も面倒に巻き込まれたことがあった。もっともそのお陰で私は妻と結婚できたのだから文句も言えなかった。妻にしてみれば佐倉は元部下というより親友なのだ。その親友の頼みを無視できるはずはなかった。よって私は妻の頼みに従って妻は佐倉の頼みに応じたことになった。そういうものなのだ。結婚後は女には逆らわないのが良策なのだ。異常事態以外なら男の出番はないほうが良いのだ。つまり今回は異常事態だったということだった。佐倉の持ちこんだ相談は言うまでもなく厄介だった。平穏を乱す才覚なら佐倉は日本一だった。

佐倉の商品化で多忙を極めた一週間が過ぎると営業部内は落ち着いた。落ち着いたことを見計らって私は有給休暇を一日だけ取った。妻が休みの水曜日に合わせて。

「車で行くの？電車で行くの？」水曜日の朝妻が最初に私に言ったのは佐倉の実家に向かう手段だった。

「電車にしよう」私が言うと妻は早速娘をおぶって玄関で待機していた。

「ベビーカーは？」

「おぶっているほうが良く寝るのよ、この子」妻は荷物を全て私に任せて出掛ける催促をした。私は朝食も取らずに急かされるまま外に出た。

私と妻が佐倉の実家に到着したのは十時前だった。

「おっはようございまぁす！やっぱりチーフは優しいですねぇ。助かります」佐倉は朝からフルパワーだった。佐倉の母親が「いつも娘がお世話になっていますねぇ。響子が無理を言ってすいません」と言って何度も頭を下げた。「母ちゃん！お茶とお茶菓子お願い」と佐倉が言うと佐倉の母親は小走りでその場を去った。佐倉の母親は佐倉とは違い常識を備えた人だった。ユニークな点は共通してい

た。お茶ではなくカルピスと芋羊羹を持って現れた時にそう思った。正直言ってカルピスと芋羊羹はあまり合わなかった。
「母ちゃん！芋羊羹しかないの？」佐倉が言うと佐倉の母親は「あぁはいはい」と言って乾燥芋を持ってきた。芋が好きな家族のようだった。
「実はですねぇ、帳簿の付け方がわからんのです。教えてください」
「帳簿？」
「はい、チーフなら詳しいと思ったんですけど」
「それって経理に聞けばいいんじゃないの？」
「あっ、やっぱり」
「そりゃそうだよ」
「それじゃ、営業を教えて下さい」
「営業？」
「はい。あちこちで営業してマイの学費を稼ぐんですよ」
「あちこちって何処？」
「日本はチーフとマネージャーのところだけでいいんです。今度はイギリスとインドですかね」
「イギリスとインド？」私と妻は呆気にとられた。
「はい。ダニエルとイギリスに行きます」
「イギリス？」
「イギリス国籍ですからねぇ。マイはケンブリッジとかオックスフォードに進学しちゃうかもしれないですねぇ」佐倉は二十年先の未来に思いを馳せていた。私は佐倉の娘が勉学に励む姿を想像できなかった。
「ダニエルはなんとかっていう大学院に行っていたらしいからマイも勉強出来ちゃうと思うんですよねぇ。でも私に似たら絶望的だなぁ。困っちゃいますねぇ」佐倉は一人で勝手にしゃべっていた。
「ねぇ佐倉、ダニエルは何て言ってるの？」妻が尋ねると佐倉は「もちろんイギリスでバンバン稼ごうって言ってます」と答えた。バンバン稼ぎたい夫婦の思惑に私と妻は巻き込まれることになった。

それは佐倉が再び日本を離れる前の最後の恩返しとなった。

１４　佐倉の家族愛

佐倉の相談は予想通り平穏と無縁な日々を私と妻に与えた。翌日、私は会社の経理で佐倉に帳簿指導できそうな人材を探し、同時に海外に納品した過去の営業実績を調べた。社内以外にも手を回した。大学時代の旧友の中から商社に勤める者を探しだし日本の衣料を扱ってくれそうな小売店を教えてもらったりもした。妻は妻で同様に情報を集め佐倉の梅干し柄を方々にアピールしていた。我が家は梅干し柄の営業代理店のようだった。そんな日々を過ごしていたある日、ダニエルが私を訪ねて会社にやって来た。

「ご協力ありがとうデス。お陰で三つのお店がキョウコの商品を扱ってくれますネ。今度は梅干し柄の浴衣でぇす！」

「浴衣？」私はシャツを想定していたのでたまげた。

「そうでぇす。浴衣なら日本製がイイのでぇす」

「なるほど。今度は浴衣ですか」

「来月リバプールに引っ越しまぁす。遊びに来てください」ダニエルは踊るように喜びを表現すると嵐のように去って行った。まったく人騒がせな夫婦だ。妻によればインドでも梅干し柄の浴衣を発売することになったとのことだった。わずか一週間で佐倉の思惑は達成された。しかも梅干し柄のシャツとTシャツはどこでも完売したので追加注文に追われ佐倉は大忙しだった。

「でも、どうして佐倉はこんなにたくさん稼ぎたかったのかしら？お子さんの学費を心配するのはちょっと早いと思うけど」妻が抱いた疑問は私も感じていた。佐倉が梅干し柄で稼いだ金額は尋常ではなかったのだ。この先ヒット商品が生まれなくても今回の売上で相当な利益があるはずだった。佐倉の思惑が別にあることを私は感じた。私はそれとなく佐倉に聞いてみようと思った。佐倉が素直に答

えるかどうかは分からなかったのだが。

私は妻の店に営業で行ったついでに佐倉の実家に顔を出した。佐倉は予想以上にてんてこ舞いしていた。注文が殺到していたのだ。

「おぉ！チーフ、手伝いに来てくれたんですか？すいませんねぇ」佐倉は勝手に勘違いをして商品の梱包の説明を始めた。

「いやいや、売れちゃいましたねぇ。こんなに注文が来るとは思わなかったですよ。これで母ちゃんと父ちゃんの老後は安泰だなぁ」佐倉は意外なことを言った。

「老後？」私は思わず口走った。

「そうです。この梅干し柄のお陰でここは小さな工場になったんですよ。私がイギリスに行っても母ちゃんが引き継いでやってくれるんです。それに父ちゃんが病気なんですよ。しばらく入院していて働けないから母ちゃんが働くんです」佐倉は不幸な事態を笑顔で話した。

「お父さんはそんなに悪いのか？」

「悪いみたいですねぇ。でも治るみたいですよ。父ちゃんは頑丈ですからね。仕事ができなくて悲しいみたいですけどネ」

「お前、大変だったんだな」

「大変なのは母ちゃんです。私はリバプールに行っちゃいますから。梅干し柄の次も考えたのでしばらく平気ですよ。今度はこれですよ！」佐倉はスケッチブックを開いて見せた。そこにはコスモスが描かれていた。梅干し柄のようにコミカルなものではなく淡い色彩で描かれたコスモスの柄だった。私が見惚れていると佐倉は次の頁を開いた。

「これはイケそうですよね」佐倉が自信を持って見せた頁には雪のように舞い降りる天使の絵だった。赤ん坊の姿をしたたくさんの天使が雪だるまの周りを舞っている図柄だった。

「すごいな」私は息を呑むほど感心した。

「でしょ、でしょ！」佐倉は両親の為にささやかな家内制手工業を

創設して、その継続のための図案を描いていた。そして佐倉が望んだ風景がその絵の中にあった。その絵を閉じて佐倉が見せてくれた絵は私に感銘を与えてくれるものだった。その最後に佐倉が見せてくれた絵は佐倉が私たちに与えていた印象そのものだった。それは桜の花だった。丸みを与えたディフォルメタッチの桜の花は陽気な佐倉そのものだった。

「チーフ、営業お願いしますね」佐倉はスケッチブックを閉じると作業場に戻って行った。私は佐倉が望んだ幸福の姿を垣間見た気がした。予定外の梱包作業をしながら私は最も純粋な動機で生まれた商品に強い愛情を感じていた。

15　最終話　佐倉、再び

夏の空から入道雲が姿を消すと風は秋の匂いを運び始めた。佐倉が日本を発つまでの時間がわずかとなって会社の同僚たちは見送りの宴を準備し始めた。当然私と妻も巻き込まれた。佐倉の意思に関わらず周囲は大いに盛り上がっていた。しかしその頃佐倉は病院で危篤の父を見舞っていた。その佐倉から私に電話があったのは営業部の終礼が終わった時だった。

「チーフぅうううう」佐倉の泣き声だった。

「どうした？」

「うわぁん。チーフぅうううう」佐倉は号泣していて何を言っているのかが分からなかった。

「今どこだ？」

「病院ですぅ。うわぁん。あー、あー、お父ちゃんが、お父ちゃんが」

「お父さんがどうしたんだ？」

「うわぁー、お父ちゃんが生き返ったぁ」

「なに？」

「お父ちゃんが助かったよぉ」佐倉は父親の無事を伝えるために電話をしてきたのだ。

「今から行くから病院にいろよ」私はそれだけ言って妻に連絡をした。そして会社を飛び出してタクシーを捕まえた。

病院に到着すると妻が佐倉と一緒にいた。佐倉の母親は私に頭を下げて「ご心配をおかけしました」と言った。佐倉の父親がどんな病気だったかは知らなかったが重病だったことは疑いようがなかった。

「チーフぅうううぅ」佐倉はまだ泣きやんでいなかった。その手には幾つものお守りが握られていた。ダニエルが佐倉の側で呆然として立っていた。

「良かったですね」私はダニエルに言った。
「もうお父ちゃんは安心だそうデス」ダニエルは泣き崩れる佐倉を見ながら私に言った。
「これで心置きなくリバプールに行けますね」私が言うとダニエルは私の手を両手で握って「ありがとう」と言った。妻は佐倉の肩を抱いて泣き続ける佐倉に声をかけていた。
「マネージャーぁあああぁ！」佐倉は安堵して緊張から解き放たれた。妻は佐倉に何度も「良かったね」と言った。私は佐倉の胸中に深く沈みこんでいた葛藤を初めて知った。佐倉は梅干し柄のシャツを縫いながら常に病床の父を案じていたのだ。溜めこんだ不安はやっと彼女の胸中から放たれた。気丈に振る舞いながらも幾つものお守りに念じ続けた佐倉の苦悩はこの時終わったのだった。
　それから一週間後佐倉を見送る華やかな宴が催された。その宴にはダニエルとマイちゃんもやって来た。コスモス柄のお披露目はマイちゃんの衣装だった。佐倉に似て陽気なマイちゃんは集まった来賓に笑顔を見せて喜ばせていた。佐倉は「皆の衆、ありがとう！」と言って礼を言って会場を回っていた。佐倉との別れを惜しみ泣きはじめる者が多数現れた。佐倉がもたらした数々のエピソードはこの日が最後となった。佐倉はこの日最後の言葉を残した。別れには相応しくないその言葉は「ありがとうございました」だった。誰も「さようなら」を口にしなかった。佐倉は再び日本を後にした。それは長い長いお別れとなった。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2569t/

さくら、ふたたび

2011年5月14日15時55分発行